

西洋思想の場合

——流出論もしくは善的一元論の検証——

五十嵐 一

一

西洋の哲学思想はプラトンの注釈であったとも評されるし、プラトンをキリスト教徒として解釈できないかと汗を流してきた歴史であると揶揄される。

たしかにプラトン哲学の骨格をなすイデア論は、プラトンに限らず西洋哲学思想の典型的思考法として、二千数百年にわたり様々な変奏をかなでてきた。そしてイデアの中で最も根本的なのが善のイデアであったように、西洋における善悪の思想の背景にもイデア論的思考法が流れていたことは言うまでもない。

ところで善のイデアにせよ、イデアという根拠的存在を示す言葉の語源がそもそも美しい顔かたち、美形の相貌を意味していた以上、先ずもって形のなかの形としての善のイデアなのであった。

健康で美しい身体を持つことがひとつの理想であったのがギリシア思想の特徴であるから、そのような思想的傾向は当然ともいえるが、そこで悪とはそのような美しい形の破壊された醜さとして出現してきた。

「最善なのは健康で、次善なのは器量よし、して三番目には正直に稼いだ財産さ」という当時の流行歌を引用したのはソクラテス自身であった(『ゴルギアス』491A)。そしてプラトンを師匠としてイデア論から独自のエイドス論や実体論を展開したアリストテレスは、病氣というものを「実体の欠如」(ヘー・ステレーシス・テース・ウーシァース)と見做し、病氣の反対項としての健康のエイドスを立てていたのである。

ここで注目すべきは、美形にせよ健康にせよ、およそ善なるものの基本的イマージュが明確なくまどりを持ったかたちとして表

象されていた点である。そして醜にせよ悪にせよ、そのような私たちの破壊ないし乱調として把握されていた事実であり、悪がひとつの明確なかたちとしてイマージュされてはこなかった点である。換言すれば西洋思想の、特にイデア論的思考法の特徴としては、善悪二元論的な対立項の図式よりも、善の一元論とその連続的破壊過程に依じての悪の出現という解釈が主潮となってきたのである。そしてここにイデア論的思考法がそのままキリスト教的善悪観と共振共鳴する素地が拓かれた。

二

西洋のキリスト教思想の中興の祖として、アフリカ北岸の地に生まれ、マニ教徒として若き日を送りながらもミラノでの回心を契機としてキリスト教に改宗した聖アウグスティヌスの存在を忘れるわけにはいかない。ラテン教父としてその重要な地位は、善悪の思想をめぐるキリスト教思潮、ひいては西洋思想の歴史の上で拳拳服膺する必要がある。

アウグスティヌスが心服していたマニ教はペルシア古来のゾロアスター教に根を持つように、典型的な善悪二元論に立つ教えであった。さらに念の入ったことに善と悪それぞれに神々たちの軍団の控える多神教信仰をその根幹としていた。青年アウグスティヌスの心を抱えたこの多神教にして善悪二元論の思想はしかし、ミラノでの回心の後に次第にキリスト教信仰に取って替られる。

そこでは一神教に根ざした、しかも善的一元論が支配することになる。

ミラノ回心の劇的な経緯については彼自身の『Confessiones』に詳しいが、善的一元論については『De Ordine』において開陳されている。そこで悪とは善的一元論に秩序づけられた光の位階に忍びこむ闇として、あるいは全き形相に入り込む質料性の汚れとして理解されていた。しかしにも拘らず神の恩寵と祝福により、善の回復がなされ得る可能性が開かれていたことは言うまでもない。

すでに明らかのように、アウグスティヌスの善的一元論は、先輩のプラトン主義者プロティノスにおける光の形而上学と類比的な構造に立つ。全き光としての根源的一者を神の如き存在として立て、そこからの流出として光が全宇宙に充滿するが如くに諸々の存在物が出現してくる。しかし同時にそれらは質料性の闇に侵されているのである。いわゆるプロティノスに典型的な「流出説」(emanation theory)である。

プラトン自身の思考以上にプラトン主義が流布することによって一般となったためにこの「流出説」もしくは「存在度説」(the Greek of reality theory)が西洋の哲学思想から西洋化されたキリスト教内部において支配的であった。善の陰としての、光に対する闇の如き悪。この考え方はなかなか強力に人の心を支配する。しかしながらそこに問題点はないのか。マニ教的、つまりはゾロ

アスター教的もしくは東方的思考法はすべて超克されて西洋の勝利に帰するのであろうか。以下に二方面から反省を加えてみたい。その一方面とは西洋思想内部にもしつこく残存する善悪二元論的思考法の亡霊であり、他の一方面とは敢えて悪役を立てる思考法の効用についてもう一つの東方的知恵であるイスラームの発想法からの反省である。

三

「諸悪の根源」(the root of evils) という表現がある。例えば「共產主義は諸悪の根源」との評言に代表されるように、何かしら悪役を立ててその悪業を批判するときの決まり文句である。それが比喩としての文学的表現に止まっているうちは宜しいが、問題はそのような悪の存在を実体化する傾向にある。西洋人は一方でイデア論のように繊細な「流出説」もしくは「存在度説」を紡ぎ出して善的一元論を開拓したものの、他方で「諸悪の根源」的発想法に立つ悪の実体化とその魔女狩りを続けてきたのである。

政治的権力闘争の場においては敢えて敵役を明確にする必要から、相手の悪魔呼ばわりもいたしかたない、との解釈もあろう。しかし看過できないのは諸悪の根源の実体化が、一種の科学主義のヴェールをまとうて遂行されることである。その典型的ケースが近代西洋医学における細菌病理学の登場である。

R・コッホの結核菌の発見は、それまでの病理観に革命的変化

をもたらしたことは確かに一つの事実である。肺の辺りに熱くて湿った血液が溜り過ぎることから生じる腐乱が元で生じる肺癆症(結核の旧い病名)という病名、病理観が一変されたからである。肺の辺りに結核菌が巢喰うことから生じた細胞的変異が結核となったのが結核という病気なのである、と見直しがされた。いわば諸悪の根源としての結核菌が別決され、その正体が明らかになるとともに治療方法も新しく改変されたのである。従来のように肺を冷く乾かせばよいのではなくて、ペニシリンやストレプトマイシンのような抗生物質で病原菌を直接に叩く治療法が開発されたからである。

抗生物質の開発に裏打ちされた細菌病理学の成功は目ざましかったものの、それが全てで万能ではなかった事実は近年証明されてきている。ペニシリン・ショック死事件に象徴されるような抗生物質の副作用——もしくは一般に薬害の問題——は天使の「贈り物」(Gift)がいつ「毒」(Dag Gift)に転化するやも知れぬ危険を物語っている。さらに病理学的にもすべての病気に病原菌が見い出せるほどに単純ではないことは現代人病と呼ばれる病気の殆んどに、例えば高血圧症にせよ糖尿病にせよ心臓病にせよ、病原菌が存在しないことから明らかである。

加えて統計の示す所からも、抗生物質投与が結核病で死亡する患者の減少傾向に何らの意味ある変化を及ぼしてこなかった事実が、結核予防や治療の複雑微妙なバランスを物語っている。死亡

患者の、つまりは罹患者の減少は、公衆衛生の整備と栄養状態の改善からもたらされたものなのである。逆にいえば栄養状態が良く、過労などの悪条件が重ならなければ病原菌の保菌者であつても発病しないのである。結核という病氣も、周囲の様々な条件のバランスの中で発病に至るのである。

諸悪の根源の実体化がそのまま病氣の正体を暴きその治療に直結するわけではない事情については、最近の医学において次第に明されてきている。歴史を更に詳しくふり返れば、コッホ流の病原菌医学だけがすべてではなかったことが、例えば当時にあつて強力な反対意見を述べたR・ウィルヒョウの学説からも窺える。彼は病氣というものをもっと大きな枠組の中におけるバランスの問題として扱うべきことを主張していたが、同時に病氣の一つの生命現象の一過程であると解釈し、*Leben unter veränderten Bedingungen* (条件変動下の生) と見做したのである。

今日的医学観からみればむしろ妥当な見解と映るウィルヒョウの学説が不当に無視されてきた背景には、彼のライヴァルであつた鉄血宰相ビスマルクがコッホを全面的に支持し、全プロシヤ陸軍の研究費を病原菌病理学の一派にまわしたという史実がある。政治的イデオロギー絡みの抗争が医学にまで及んだことには歴史の皮肉も作用していたが、悪の存在を実体化して魔女狩りをやりたい心性は西洋人の性根に深く染み込んでいるに近い。つい近年も共産主義者を悪魔呼ばわりをし、敵の攻撃に対して宇宙空間か

らミサイル攻撃で叩けば先制攻撃的防衛が可能であるなどと、一世代も以前の抗生物質で病原菌を叩けばよい式の医学観ならぬ政治イデオロギーに毒されていた政治家がいたからである。

四

病原菌を諸悪の根源として実体化する誤謬は、敵役として相手を悪魔呼ばわりするイデオロギー戦略の政治性と相俟って増幅されてきた。その両者がしばしば混交されて、政治的対立者や敵陣営を病原菌扱いする例は、ユダヤ人をゲルマン社会の中の結核菌呼ばわりしたヒトラーの場合をはじめ枚挙にいとまがない。

しかしながらここで注目すべきは、相手方ではなくて敢えて自らを敵役に仕立てて、相手の批判を吸収してまでもひとつの役割を演じ切ろうとする態度の効用性である。イラン・イスラーム革命の指導者として政権の中核に位置し、批判の矢面に立ってきたホメイニー師の場合など、その好例といえよう。

ある政治的状況の中で決断をし、一つの政策を責任をもって遂行していくには火中の栗を拾う以上の覚悟が必要であるし、自らを批判の矢弾に晒す危険も犯さねばならない。敢えて悪まれ役を演ずることこそ、政治家の基本的資質なのである。その限りでホメイニー師の、つまりはイスラーム精神の効用は小さくなかった。例として『悪魔の詩』事件を考えてみよう。たしかに、作者のラシュディ氏に対する死刑宣告は過激に映り、相手の人権も弁

えぬ暴挙に等しいと見做されもした。しかしここで斟酌すべきは、そのように相手を悪魔呼ばわりする以上に自らを悪役に仕立てて、いわば敢えてケンカを買って出た態度である。ラッシュディールの人権擁護の大合唱のかけ声の陰で、欧米に出稼ぎに出ていた中東やインド、パキスタンの人々がうけていた差別やイジメなどの人権侵害に対して、殆ど注目されていなかった事実を忘れてはならない。

「悪魔の詩」に先ず反発したのが、それら虐げられてきた人々であった。アラブもイランもインドもパキスタンも区別なく、一把一からげにテロリストと見做され、市民レベルの嫌がらせをうけてきた人々が、同小説の出現により新たなイジメの火種を感じて抗議デモに立ち上ったのである。そして各国にある英国大使館襲撃など危険な徴候が出始めた時に、ホメイニー師の死刑宣告が出された。たしかにそれは過激ではあったが、それにより敵の正体ははっきりとしてきたこと、そしてある種のバランスの回復がなされた事実を見逃すわけにはいかない。ホメイニー師の決定は過激に過ぎるとしても、出稼ぎ労働者たちの苦しみは分るとの反省が、そして彼らの間にもとりあえずホメイニー師にゲタを預けてみよう、との冷静さが生じてきたからである。

表面的には過激とか暴力的と映ることで、その内実には意外に深い知恵や効用性が潜むことが少なくない。特にイスラームにおいては元来が、政治経済、軍事のすべてに相渉り、根底から

——ラディカルの意義は過激的というより根底的である——考えていこうとする教えである以上、その知恵の深みに降り入って共感する必要がある。例として今回の「悪魔の詩」事件でも、生命の安全や表現の自由などの基本的人権をも弁えぬイスラームの残虐さを批判する声が高かったが、基本的人権の基本的たる所以にまで測鉛を下して反省する議論が少なかったのは、基本的とか普遍的という言葉に慣れ過ぎた西洋人の欠点であったのかも知れない。

ここで一つの史実を紹介しておこう。しかもこの話を表面的に解釈するならば、イスラームの残虐性がまた一段と強調されかねない例なのである。つまりそれは一九四八年、国際連合において世界人権宣言が採択された時、これに棄権をした国にサウジ・アラビアがあったこと、そしてかの有名な「すべての人間は生まれながらにして自由かつ平等である……」に始まる第一条の草案審議の際、強力に反対意見を提出した国々にサウジの他、シリア、エジプト、イラクなど要するにイスラーム諸国が多かった事実である。

やはりイスラームは過激で暴力的であるなどと短絡反応をおこしてはならない。注目すべきはその反対理由である。その第一が、現実には生まれながらにして不自由と不平等が存在するのに、その解決策も示さずに「生まれながらにして自由、平等である」などと責任逃れの頬かむりの発言をするのは宜しくない。「自由、

平等であるべき」としてその現実的対策を示す条文に変更する必要があるとの反対理由であった。第二が、基本的人権などとすべて人間の側の事情だけで問題を解決しようとする態度の傲慢さへの批判である。基本的人権の前に人間を包むもっと大きな存在、例えば神とか自然環境とか、そのような位相について考察し反省する必要がないか、という反対理由であった。

基本的人権などという言葉に安住し、その思想の普遍性の流出的論的伝播状況を確信してきた西洋人の思想の欠陥を、イスラームというラディカル（根底的）な思想を一つの合わせ鏡として反省してみても宜しいのではなからうか。

（いがらし・ひとし、哲学・イスラーム学、筑波大学助教授）